

## 消 息

## 上田先生と商大東亞經濟研究所

東亞經濟研究所は昭和十五年四月呱呱の聲をあげるとともにその生みの親を失つた。そして上田先生の遺業として自からその道を開拓せねばならなくなつたのである。一つの調査研究所が大學に附屬されねばならぬとの先生の抱負は先生が昭和五年の初めに「日本經濟研究會」を創設せられたことによつて知られる。そこから周知のごとく、日本人人口問題についての輝かしい業績が生れ出たのであつた。

先生の學風は外國の書物を通じてその理論を概念的に展開するといふのでなく、先生の直観、體驗の地盤から生へ出るといふ工夫であつた。外國の書物も先生の直観に融化されそして先生自身のものとして鑄直された。かくして先生は大地に足を下した學風を打立てられたのである。この學風はそれが組織化されるべき必然的に調査研究所に結びつかねばならない。

昭和十四年の春、先生は大陸に旅行せられ、新時代の情勢を充分に體驗せられたのであるが、その前後に東亞經濟研究所の

構想をもつてゐられたと思はれる。偶々各務謙吉氏の遺志によつて本學に東亞經濟研究所の資金が寄附せられ、先生の構想はここに實現することゝなつた。昭和十四年十月に準備委員が任命せられ、十五年の四月から開所する運びとなつた。しかもその五月八日、先生は急逝せられたのである。

私が永らく名古屋において産業調査室の主任をしてゐたことのため東亞經濟研究所の研究部長に任命せられたのであるが、先生の研究方針を充分に體得する期間なく途方に暮れざるを得ない。しかし、先生の遺訓は明確な言葉としてでなくともおのづから推測しえられるし、またわれわれはそれを建設的に發展せしめねばならない。大學附屬の經濟研究所は民間の研究所と趣きを異にすべく、單に目前の事象を實證記述するのではなく、事象の中から新なる學問體系の建設を目指し、西洋的地盤に打立てられた諸科學を東亞的地盤に再建しなくてはならない。これは上田先生が身をもつて示された遺訓であらう。幸にしていまわが東亞經濟研究所は國策的研究機關として、また文教の施設として認められんとしつつある。上田先生の墓前にこれを報告しうる時も近いであらう。(二五、一二、一七)(赤松 要)